

# 母性看護実習におけるカンファレンスの 内容と学び

—— 実習記録から ——

The content of a conference and learning in a  
motherhood nursing practice

—— From record practice ——

坂本 保子      羽入 雪子

**要約** 本学は、開校して7年目を迎え、これまでの母性看護学教育の振り返り、今後の教育的示唆を得て学生の実践能力向上のため教育体制を整えたいと考え、本研究に取り組んだ。目的は、母性看護実習における学生カンファレンス記録から内容・学びを明らかにすることとした。研究内容は、カンファレンス記録内容を分析しデータをコード化、内容の類似性に基づきカテゴリ化した。抽出した58のコードは、7のカテゴリ【看護技術】【対象者に関すること】【保健指導】【看護過程】【指導者の助言・指導】【ケースカンファレンス】【テーマカンファレンス】に分類され、すべては「学びの共有」として実習に活かされていた。中でも、受け持ち対象者との関わりや臨床指導者との関係性の構築・コミュニケーションへの困惑、また、看護過程の展開、看護援助の実施に戸惑いを感じている内容が多いことがわかった。

今後、学生が主体的にまた意欲的に母性看護実習を取り組み、学習効果を上げるためのカンファレンスのあり方を検討・工夫し、活用していく必要がある。

## I. は じ め に

看護教育において実習でのカンファレンスは、教育効果をあげることを目的としている。

カンファレンスは、日々の反省と学びの共

有を行うことで翌日の実習計画を充実させることを目的としているが、個人の体験について集団思考することで全体的な学習効果が得

られる。平成23年看護教育の内容と方法に関する検討会報告書<sup>1)</sup>は、看護実践の場の出来事や体験を振り返る必要があると報告している。

本学では、母性看護実習を4施設で行っている。2週間という短い実習期間で、学内実習、病棟実習、外来実習、母親学級の参加などをしており、このような過密スケジュールの中で学生が個人で学びを深めることには制約が伴う。斉藤、磯崎<sup>3)</sup>は、「カンファレンス演習の学びは、参加メンバーの意見と新たな気づきと自己の成長のきっかけとなる」と述べている。短い実習期間の中で有効に時間を活用するためには、グループ間でカンファレンスを充実させることで、学びの共有を図

ることができる考える。

母性看護実習でのカンファレンスは、司会、書記など役割について説明を行いカンファレンスの目的を達成するように方向づけをし、カンファレンスの運営についても学習成果として期待している。教員は、学生が実習経験を振り返り、実践の修正や改善、発想の幅を広げるなどオープンクエッションで意思を引き出した脱線の修正を行っている。

本学は、開校して7年目を迎えこれまでの教育の振り返りを行い今後の教育的示唆を得るために、本研究では学生カンファレンス記録から内容・学びを明らかにすることを目的とし、今後の課題を考察した。

## II. 研 究 方 法

### 1. 研究調査期間

平成26年5月～平成27年3月

病院実習中に記述したカンファレンスの記録（実習病院、日付、カンファレンスのテーマ、司会、カンファレンスの内容）である。

### 2. 研究対象

調査対象は、実習終了した学生69名が、

表1 母性看護実習目的・目標

母性看護実習の目的
母性の特徴を理解し、妊娠・分娩・産褥期および新生児期における対象に応じた看護ができる能力を養う。
母性看護実習の目標
1. 妊婦・産婦・褥婦および新生児の特徴が理解できる。 2. 妊婦・産婦・褥婦および新生児の看護の特徴が理解できる。 3. 母性看護の対象に必要な基礎的看護技術を修得できる。 4. 産褥期における母子の看護過程を展開できる。 5. 母子保健医療チームにおける看護師の役割が理解できる。 6. 命を育む過程や誕生にふれ、命の尊厳について自己の考えを深めるができる。

### 3. 研究方法

研究内容は、内容分析しデータをコード化し内容の類似性に基づきカテゴリ化した。内容項目以外は記述統計をした。コード解釈、カテゴリ分類、ネーミングの妥当性・信頼性について、共同研究者間にて検討を行った。

### 4. 倫理的配慮

学生には研究目的、方法、記録は、データ化し研究発表をすることを説明した。また研

究は実習終了後の教員評価後に行われ研究への協力は得られなくても成績に関係がないこと、研究の内容は個人のプライバシーの保護に十分配慮することを説明した。尚、本研究は A 県 B 短期大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

### 5. B 短期大学における母性看護実習目的・目標は表 1 に示す。

## III. 結

母性看護実習におけるカンファレンスの内容を学びの共有とし、58 のコードが抽出され、7 つのカテゴリに分けられた（表 2）。以下、カテゴリを【 】、コードを〈 〉にて表す。

#### 1. 【看護技術】

このカテゴリは、次の 15 のコードが抽出された。〈NST 装着〉〈NST 判読〉〈レオポルド触診法について〉〈育児技術〉〈産痛緩和〉

表 2 カンファレンスの内容

カテゴリ	コード (数)	データ (数)
看護技術	15	46
対象者に関すること	8	37
保健指導	3	7
看護過程	2	9
指導者の助言・指導	7	10
ケースカンファレンス	11	13
テーマカンファレンス	12	17

## 果

〈子宮復古〉〈授乳姿勢〉〈新生児バイタルサイン測定〉〈新生児観察〉〈胎児心拍の聴取（ドプラー法）〉〈胎児付属物の観察および計測〉〈乳頭・乳輪マッサージ〉〈腹囲測定〉〈子宮底輪状マッサージ〉〈沐浴〉であった。

#### 2. 【対象者に関すること】

このカテゴリは、次の 8 つのコードが抽出された。〈情報収集の方法〉〈報告の仕方〉〈知識不足〉〈対象者の不安の軽減〉〈対象者への配慮〉〈能動的関わり〉〈環境整備〉〈目的・根拠の重要性〉であった。

#### 3. 【保健指導】

このカテゴリは、〈栄養指導〉〈退院指導〉〈妊婦の保健指導〉の 3 つのコードが抽出された。

#### 4. 【看護過程】

このカテゴリは、〈看護計画の実施援助について〉〈看護問題の方向性について〉の 2 つのコードが抽出された。

### 5. 【指導者の助言・指導】

このカテゴリは、次の7つのコードが抽出された。〈報告の仕方〉〈相談の仕方〉〈目的・根拠の重要性〉〈環境整備〉〈時間の活用方法〉〈情報収集の方法〉〈対象者への配慮〉であった。

### 6. 【ケースカンファレンス】

このカテゴリは、次の11のコードが抽出された。〈高血圧症候群の対象者の援助について〉〈高齢出産〉〈外来での妊婦の保健指導〉〈帝王切開後の母子の看護〉〈マタニティブルー〉〈経産婦の育児技術〉〈授乳〉〈乳頭

亀裂〉〈母子分離〉〈沐浴〉〈ケースカンファレンスの進め方〉であった。

### 7. 【テーマカンファレンス】

このカテゴリは、次の12のコードが抽出された。〈育児技術の指導方法〉〈情報収集の方法〉〈切迫早産の安静療法でのストレスに対する関わり方〉〈男子学生の実習時での関わり〉〈帝王切開の看護〉〈妊婦体操〉〈妊婦高血圧症候群の妊婦について〉〈母子相互作用〉〈母子分離〉〈母親の抱える悩み（基本的ニーズ）〉〈命の尊厳について〉であった。

## IV. 考 察

### 1. 【看護技術】

看護技術では、コード数の最も多いのが〈レオポルド触診法〉であった。次いで〈沐浴〉〈胎児付属物の観察および計測〉〈胎児心拍の聴取（ドプラー法）〉〈NST判読〉〈NST装着〉〈腹囲測定〉〈産痛緩和〉〈子宮復古〉〈授乳姿勢〉〈新生児バイタルサイン測定〉〈新生児観察〉〈乳頭・乳輪マッサージ〉〈子宮底輪状マッサージ〉の順である。学生は講義や演習を通じて技術練習を重ねるが、臨床の場における実際の体験は反省や気づきが多く、カンファレンスで学びを共有することが多く、妊婦・産婦・褥婦および新生児の特徴を理解していった。また技術経験録を使用し看護技術の到達度を具体的に学生に示すことでさらに技術習得につながっていく。

### 2. 【対象者に関すること】

#### 1) 〈情報収集の方法〉

〈情報収集の方法〉では、コミュニケーションに関することが多く、コミュニケーションをどのようにとればいいのか、またそのコミュニケーションを介してどのように情報収集しアセスメントするのかに戸惑いが多かった。その結果、その対象者とかかわりができない、ケアの自信がないために積極性にかける場面がある。このことは〈能動的関わり〉ができないことに関連していることが考えられる。また〈能動的関わり〉には、対象者に関すること、指導者に関することがあげられ指導者に対することでは報告の仕方についてあげられていた。看護を学ぶことは、コミュニケーションを軸にした人間関係の構築である。学生が目的意識をもち意欲的に関わるようにする必要がある。

## 2) 〈報告の仕方〉

〈報告の仕方〉では、「指導者が忙しそうで声をかけるタイミングがつかめない。」また「簡潔に報告することできないため報告の時間がかかりすぎる」などがあげられた。授業や学内演習が実習と結びついていない学生や子宮復古、授乳状態など経験不足により観察項目や正常か異常の判断が難しくどのように報告して良いのかわからない学生もいた。学内や実習中においても報告の仕方について訓練をしていく必要がある。

## 3) 〈知識不足に関すること〉

〈知識不足に関すること〉では、「NST 装着に関すること」「子宮底測定に関すること」「新生児観察項目に関すること」「正常値に関すること」「清潔区域に関すること」が挙げられている。事前学習の不足により質問に答えられなかったこと、観察項目が不足していたなど自己学習不足や知識不足を訴えた学生が見られた。その一方で事前学習や実習中に疑問に思ったことや目的・根拠の重要性に気づき資料やテキストを活用することで主体的な学習方法を身に付けながら実習している内容もあった。カンファレンスを通じて学びを共有することで学生それぞれの知識不足を補うことができていたと考えられる。

## 4) 〈対象者への配慮〉

褥婦は、分娩の疲労に加え授乳などの育児の疲労が蓄積する。〈対象者への配慮〉には、褥婦の疲労を考慮した配慮、羞恥心に対する配慮が抽出された。また、母性看護は、羞恥心が伴う処置や援助が多いため、プライバシーの配慮とともに適切な援助が必要であることを学んでいた。

## 5) 〈対象者への不安の軽減〉

〈対象者への不安の軽減〉では、帝王切開術前の産婦への関わりで受容や傾聴するなどがあげられ、一方で心理面のアセスメントの難しさをカンファレンスで報告していた。不安の軽減は、援助計画としてあげられる場合が多いが対象の状況の理解に伴ったコミュニケーションスキルが求められるため、難しい援助であることに気づいていた。

## 3. 【保健指導】

妊婦の保健指導、栄養指導に関することが多くあった。退院指導では指導の実際を見学することで対象者の背景がイメージしやすく個別性による指導を学んでいた。妊婦診察や産後健診の保健指導の場面を通じ各期の特徴と変化、妊婦健康診査の特徴の理解や母子保健医療チームにおける看護師の役割の理解を深めている。褥婦の退院指導では、個別性を活かした指導を学ぶことができ、受け持ち褥婦の看護へ活かしていた。

本学では、実習施設によっては保健指導の中で沐浴指導について学生に主体的に指導案を作成させて、実際に保健指導を実施している。このことにより対象者の背景や個別的吗かわりができサポートする家族関係についても学ぶことができていたと考える。

## 4. 【看護過程】

短期間の実習の中で日々変化する対象の看護過程では、その展開において学生自身の知識の統合が求められる。学生は、情報収集や分析、問題抽出の段階で戸惑いを感じているため〈看護問題の方向性について〉のカンファレンスが多く実施されていた。

母性看護学では、母子を通じて正常な経過をたどる対象者に対する援助を学ぶ。よって看護過程では、問題解決の思考に加えその人が今後どのような経過をたどることが望ましいのか、現状維持や更に良い方向へ支援する「ウエルネスの視点」が必要となる。しかしながら、問題がないことに戸惑いを感じ健康な経過の中から問題点が見つからないため看護過程の展開ができないという学生も多くいた。今後は、学内での看護過程の展開演習では、アセスメントの視点を十分に養えるようにしていく。その際、ウエルネスの視点でも対象をとらえることができるように指導していく必要がある。

〈看護計画の実施援助〉では、褥婦と新生児では情報量が多いこと、経過が早いことによりアセスメントが後追いになり計画・実施まで至らないことがある。また、直接的援助よりも確認や見守りが多いため対象とのコミュニケーションがさらに必要となる。直接的援助が他の領域と比べると少ないため学生は困惑感をいだいていた。受け持ち褥婦の事例を通じて退行性変化や進行性変化の観察ができ、またこれらの経日的変化や影響を及ぼす心身の要因について看護過程を通じて理解することができるよう関わっていく必要がある。

## 5. 【指導者の助言・指導】

【指導者の助言・指導】では、学生は、指導者に対して自分から積極的に助言や指導を求める行動をするより、指導者からの声掛けやアクションを望む傾向がみられる。高橋・中島<sup>5)</sup>が「学生は、指導を受ける際に、自分から積極的に助言を求める行動するよりも指導者から声かけを望む依存性は、望ましい姿

勢であるとは思えない。」と述べている。主体的に学習活動ができるようにすることが必要である。〈環境整備〉では、環境調整や感染に関する意識が低かったことが考えられる。

## 6. 【ケースカンファレンス】・【テーマカンファレンス】

【ケースカンファレンス】・【テーマカンファレンス】では、妊婦に関することや褥婦の育児技術に関することが多かった。一方で分娩の経過に関することや乳房ケアに関する熟練した技術に関することは少なかった。〈男子学生の実習時での関わり〉では、井田・斎藤<sup>2)</sup>は、「男子学生も女子学生と同様に母性機能を発揮する時期の対象を理解する必要があり、父親の育児参加が期待される現在男子学生が実習を行う意義は大きい」と述べている。男子学生は、男性という立場に戸惑いながら母性看護実習における意義、父性観や命について考えることができていた。〈命の尊厳〉についてでは、命の尊さや自分の誕生を振り返り「命の大切さ」「親への感謝」「自己の母性観や父性観、看護観」「命を育む過程や誕生」に触れ、命の尊厳について自己の考えを深めるができていた。また、命が生まれる場であるとともに流産や死産があり母性看護は喜びの場だけではないことを学んでいた。

それぞれの場面においてケース・テーマカンファレンスを通じて学びが深まり、母性看護の特徴を理解し目標達成につながっていると考えられる。

母性看護実習の対象である妊婦、産婦、褥婦、新生児は基本的に健康な人であるため、心身の回復とともに親役割の過程の支援や、



新生児の生理的変化の促進が看護の中心である。また、対象者は時間とともに大きく変化していくことも特徴である。このような状況で学生が効果的に実習するためにはカンファレンスは有効であるといえる。カンファレンスでディスカッションすることでグループダイナミックスを活用し多様な視点で考え気づくことができ思考を発展させることができる機会を得る。

臨地実習におけるカンファレンスの目的は、知識と実際を統合する訓練の場であり情報共有、技術の習得、価値観の広がり、自己

理解の場である。表、谷本<sup>3)</sup>らは、カンファレンスについて「学生の看護行為の振り返り、再構築することで学生は学びを深め、様々な体験は学習意欲を左右し、自信につながる。対象者との出会いが今後の看護に活かせるような働きかけを指導していく必要がある。」と述べている。カンファレンスという場面は、学生が経験したことを活かし看護を考えさせる貴重な時間であることを認識させ、話しやすい環境づくりや進行方法などを工夫することが大切である。

## V. ま と め

母性看護実習におけるカンファレンスの内容・学びを明らかにするため実習記録から内容分析を行った。結果、カンファレンスで話し合われることはすべて学びの共有となっていた。発表や質疑応答を通じて学生個人の学びが深まり、実習における意欲や達成感など

は学生の積極性・主体性を高めることになる。

今後、学生がカンファレンスの重要性に気づき、実習における学習効果を上げるために活用できるよう、指導方法を検討していきたい。

## VI. 文 献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（平成 23 年 2 月 28 日）
- 2) 井田歩美、斎藤早苗：母性看護実習における学生の学びと実習目標との関連性、ヒューマンケア研究学会誌 第 2 巻 2011
- 3) 表 五月、谷本恵理、高島佐代子他：母性看護実習における実習指導のかかわり、香川県立保健医療大学紀要 第 1 巻 141-145 2004
- 4) 斉藤貴子、磯崎富美子：看護学生カンファレンス演習での学び、日本赤十字秋田短期大学紀要 第 11 号 2006
- 5) 高橋早智、中島千春：臨地実習後のカンファレンス場面でのまなび—学生の意見から実習指導の検討をする—、第 42 回日本看護学会論文集 看護教育 2012